

# 住まい・ル新聞

日本ステンレス工業株式会社

発行/日本ステンレス工業株式会社  
〒409-0617 山梨県大月市猿橋町殿上630-1

電話=0554-22-2500

FAX=0554-22-5234

Vol.193 2015

10月号

## 消えて行く 学校 井上 豊

【第三部 試験対照綴】  
四年生 大試験対照

修身科

(一) 欽明帝の朝新羅と戦い我が武将伊企儼彼に擒にせられ、遂に死すとも日本男児の氣象を現し、外人を驚かせりと。その行と決死せし所以を記せよ。

(二) 本庄宗資身の戒め固かりし談話を知るならん。その行いに相応する格言を挙げよ。

(三) 人に福を受くものと禍を受くるものがあるは、天の与うるものか。將た人の招くものか。その由来する所を記せよ。

読方科  
幼学読本六七半葉ずつ  
講読  
書取  
(一) 花に麗しき花卉あり。

(二) 我等は頗る教師を満足せしむ。

門答  
(一) 春季皇霊祭は如何なる日なるや。

(二) 我朝は世界に珍しき美国なりと云う。その然る所以を記せよ。

(三) 五港中最も殷賑なる港と最も早く開けし港名を挙げよ。

(四) 灯台は如何なる用をなすものなりや。

作文科

(一) 摘草に誘われし返書

(二) 農業

(三) 借用証券  
算術科  
心算

(一) 次郎はその囊中より三〇ずつ八回算えて余りなく、太郎も二〇ずつ一二回算えて余りなき粟あり。今之を二人の生徒に分けたらば一人の得分如何。筆算

(二) 一人の商客、金四五〇円ずつ出す約束にて、その事を始めしに、内三人事故ありて出金せず。依って残りの人員にて出金せばその増加を問う。

(三) 或人年利一円に付き二〇銭の割にて金三五〇円を三ヶ年借用せしが返金する能わず。故に五カ年賦に元利返金するの約を為せり。一年の返金高を問う。

珠算  
(四) 或人三ヶ年間に茶酒煙草の為に費やす金高三〇円六〇銭なり。平均一ヶ月の経費高幾何。

(五) 牛一九頭の代三三〇円にして、一牛は七羊とその価等し。羊一頭の価を問う。

習字科  
行書一〇字 草書七字  
一筆 書状 芳簡 華墨 啓上  
御約束之新聞紙  
体操科  
機械体操重鈴第一第八節より十三節まで  
一学年  
習字 ちりぬる  
作文 硯 ハビリ ひばり らんぶ ランプ  
書取  
(一) 左を見るなよ右をもみるなよ。  
(二) 子猫はかけ来り。  
(三) 此の本の糸をこらんなされ。  
(四) 人形をのせて舟を池にうかべました。  
(五) 枝のあいだをとびまわりて居ました。  
読書  
お竹さん赤き花のついた枝を私にくれました。此はなを人形に持たせませう。

修身  
大小二つの梨の実を人よりもらいたり。之れを二人にて分かつに何れを己れに取るか。同校に行く小さき生徒下駄の緒途中に切れて困るを見たる時も自分は先に行くか。

習字科

四十九を算用数字に直せ。

五八之を日本数字に直せ。三十四と算盤に置き。四十六と算盤に置き之を石盤に答えを書かしむ。

二学年  
習字  
甲 乙 丙  
作文  
鏡 新聞紙を返す文  
書取  
(一) 赤色のぼうしを被らせませう。  
(二) 火や煙を吹き出せり。  
(三) 二本の針は長針短針と云い。  
(四) 人形は水の中へ落ちたり。  
(五) 猿は真に木に上りたり。

読本  
或日山へ行きたれば大なる猿花の咲きたる木の下にゐたり。

修身  
(一) 往來の人道を問いたる時の心得。  
(二) 貧窮の生徒火事にて学校に持ち行く道具皆焼け失せ、昇校に差支たりと聞きたる時、なんじら如何なすや。

算術  
(一) 一六本の石筆を四人分では各得る所幾何。

(二) 八七六一(二二一三三六) 〓  
三学年  
習字  
天地玄黄宇宙洪荒  
作文  
(一) 梅花を送る文  
(二) 寒暖計  
(記事)  
読書  
(一) 夜の雨に山林の花も早やうつくしく開き小鳥も飛び来りて鳴き遊びます。  
(二) 失敬 食品 療治 黒煙 城中  
修身  
(一) 他人に親切を尽したる時その礼として金員を持ち来らば受けべきか。  
(二) 司馬光は何が為めに人の大切なる瓶を破りしや。

算術  
四年生  
筆算  
(一) 三六八五×二七五 三六〓  
(二) (六五×八一) 二〇〇 ÷ 一六〓  
(三) 布を織ること毎日三丈五尺として若干日の後、一尺につき三錢にて是を売り、一三二円二五錢を得たり。この日数如何。

答 一二五日  
(四) 大魚あり。頭は背の三分の一、背は尾の四倍にして尾の長さ九寸あり。前身の長さ如何。  
答 五尺七寸  
(五) 金一七五円六五錢及び一八九円三二錢の和を四にて除すれば如何。  
答 九一円二四錢二厘五毛  
(六) 物数三七個に八を乗じ三にて除すれば如何  
答 八七二  
三年生  
筆算  
(一) 四三六十五四三×二五一一六七四三〓  
答 七七三二  
(二) 二四三一〇 ÷ 二×六〓  
答 六六三〇  
(三) 桃の実三四七〇ケあり。是を五人の童子に配分すれば各幾何を得べきや。  
答 六九四ケ  
珠算  
(四) 金二円三五錢三厘 四円七八錢六厘 三円八錢七厘  
答 一〇円二二錢六厘  
(五) 物数七四五より六九七個を減ぜよ。  
答 四八個  
(六) 七三五へ二四を乗ずれば如何  
答 一七六四〇ケ

4  
5  
+

一、【姥子さま】  
昔々、ちょうど今から二百五十年程前、真木村の沢中という所に、はなという大変信心深く、心のやさしいお婆さんがおりました。

お婆さんは、毎日毎日人さまも自分もどうか病気などせず、村中の一人一人が幸福に暮らせるようにと神様にお願いでおりました。  
或る夜のこと、お婆さんは不思議な夢を見ました。金色の光の中に白い着物を着た一人の老人が現れて、「わしは明日の朝、宮の沢にいます。社はいらぬから、そのままわしを神として祀ってくれば、どんな悪い流行力でも、きつとなおしてしんぜよう」といって、消えてしまいました。  
ハッと目覚めたお婆さんは、不思議なことがあつたのだと、東の空の白むのを待ちかねて、示された川へ行って見ました。すると今まで見たことのない不思議な形の石がありました。

したが、とても暖かい日でした。お婆さんは煎り豆をして、近所の人や子供を誘って、賑やかなお祭りをしました。  
それから後はどんな悪い風邪が流行しても、この神様にお参りし真綿の帽子をお借りして、風邪で苦しんでいる子供の首に巻いてやると、せきも次第にらくになり、なおってしまつたというこ

とです。  
この宮の沢の水は日やのどに良いといわれ、びんに入れて持ち帰つたという事です。この話を聞いて遠く甲東村の方からこの真綿を借りにきたそうです。  
風邪がなおると新しい真綿と、ブリキで作つた鳥居を持つて、お礼参りをしました。今でも新しい真綿の帽子をかぶり、前だれを掛け、沢山の鳥居があげられて「姥子さま姥子さま」と、親しまれていきます。

ながら伊豆の大島に流罪の身となつた。然しなからその居城は敵の為に焼き払われ、白縫姫は幼子為若丸を伴い、僅かの家来を従えて城をのがれ、世を忍びつつ諸国を流浪し、ようやく辿り着いた所は、甲斐の国は大蔵山(東八代郡)の麓であつた。

二、【鎮西ヶ池物語】  
今から八百有余年前、時は源平時代のことであつた。源 為朝(鎮西八郎為朝)は、藤原入道信西の忌憚にふれ、父為義の勘当を受けて西海に赴き、九州は肥後の国(熊本県)の阿蘇家に身を寄せ、そこで知り合つた白縫姫と縁を結び、京に上つたが、保元の乱遭遇することになった。強弓をもって大奮闘したものの力及ばず、遂に敗北の上、無念の涙をのみ

この池を別名「雨乞い池」とも呼び、池の側には村人の建てた白縫姫を祀つたお宮があり、今もなお池を守っている。  
さてその後白縫姫主従は山を下り、或る人家を訪れ、幼い為若丸を連れては敵に感ずかれるものと思ひ、止むなくこの事情をその家の婦人に話しました。婦人は大層同情され為若丸を末長くお預かりしようと思つた。承諾するのでした。姫はの上なく有り難く思い、婦人の能(はたらき)に恵み給えと祈つて、この地を恵能野の里と呼ぶようになったといふ。

三、【河童のくれた、面ちょうのクスリ(大月町)】  
昔々、下花咲村に、綺麗な水を満々とたたえられていた。精進淵がありあした。笹子川もこぼばかりは深みになつていて、河童がいるともつぱらの噂でした。夏にはまた格好の水練の場所、子供等で大賑わいしました。  
或る夏の事、洪水となり、この淵も黒濁りになり、日照りが続いて河童の住処には程遠い状況となり、暑さにはかならず、子供等は水泳ぎに

行く、あの噂の河童が息絶え絶えに、ひっくりかえつていました。子供等は怖くなつて村に逃げ帰り、村人達を連れて精進淵にかけ付けました。村人達は、「この際河童を退治してしまえ」と云いあひましたが、然し誰一人手を出さずとしませんでした。子供等は口々に「かわいそうに、かあいそうだ」と叫びました。

そこで、村人達は、河童の頭の皿え水をかけるのと元気になる、星野屋の井戸の綺麗な水で体を洗つてやりました。  
すると、河童は急に元気がなくなり、どぼんと精進ヶ淵にとびこんで見えなくなりました。それから暫くたったある夜のこと、村長の家の戸を叩くものがあり、急いで出て見ると、そこには河童らしい人が立っていて、竹筒を手渡しました。久兵衛さんは、びいくらいと、竹筒をひたたくると、河童は雲と消えてしまいました。  
久兵衛さんが、後でよくみると、それは一枚のクスリの処方箋でした。これは、河童が村人達に助けられた恩返しと、みんなの衆に話し、村方文書に加え、処方箋通りのクスリを作り、むらの宝としました。  
そのクスリは、面ちょうのクスリで、現在は、星野屋さんの家宝となつています。(花咲山人夜話より)



滝子山  
鎮西ヶ丸

註一 面ちょうとは、顔に出来る悪性のおでき。  
註二 「このくすりでも、命を救われた人が多くいる。」と云う。

参考文献  
大月風土記  
花咲山人夜話  
民話の会  
執筆 井上文次郎

十一月号へつづく